

氏名 吉川肇子  
学位(専攻分野) 博士(文学)  
学位記番号 論文博第366号  
学位授与の日付 平成11年3月23日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当  
学位論文題目 リスク・コミュニケーションの心理学的問題

(主査)

論文調査委員 教授 清水御代明 教授 苧阪直行 助教授 藤田和生

## 論文内容の要旨

本論文は、リスク・コミュニケーションの理念と、現実の社会問題へのその適用に関するさまざまな問題点について、社会心理学的な視点から検討を加えたもので、6章からなる。

第1章においては、リスク・コミュニケーションの理念と、リスク・コミュニケーションの問題に対する心理学的寄与のあり方を論じている。リスク・コミュニケーションは「リスクについての個人、機関、集団間での情報や意見のやりとりの相互作用的過程」と定義される。リスクに関する情報は、送り手から受け手へ一方向的に伝えられるばかりでなく、受け手から送り手へも、たとえば意見などの形で情報が送られる。この定義の背景には、リスクにさらされる、ないしは、さらされる可能性のある人々に対して、十分に情報を提供し、その問題に対する理解をはかることが重要だという基本的な考え方がある。しかし、現実にはこの定義で求められているようなリスク・コミュニケーションが実現されているとはいえない。なぜ実現されていないのか。論者は、円滑なリスク・コミュニケーションが実現しない状況には、もともとリスク・コミュニケーションの送り手にリスク伝達の意志がない場合と、リスク・コミュニケーションの送り手にリスク伝達の意志はあるが、それを阻む問題があるために、目的とするリスク・コミュニケーションが実現されない場合とがあり、コミュニケーションを技術として捉える社会心理学が本来研究対象とするのは後者の場合だと論ずる。

第2章では、リスク・コミュニケーションが対象とするさまざまな問題が、高度の科学技術、環境、消費生活製品、健康・医療問題、災害時の5つに分類され、事例を挙げて論じられた。リスク・コミュニケーションが取り扱う問題は広範囲にわたるが、本論文では、リスク・コミュニケーションを要する事態を、高度の科学技術に関する問題や環境問題などの社会的論争の事態と、消費生活製品、健康・医療問題、災害時の問題など個人的選択に関わる事態に2分する。

第3章では、社会的論争の事態におけるリスク・コミュニケーションの問題が論じられる。論者は、社会的論争の問題の理解には、社会心理学の視点と知見が有用であるとして、まず公平の問題、次いで社会的ジレンマの問題を論じ、さらにリスク・コミュニケーションにおける信頼の問題を取り上げて詳しく検討している。論者によれば、信頼がリスク・コミュニケーションの重要な要因であることは容易に主張できるが、いかにして信頼を獲得し、それを活用するかという問題解決の方法は必ずしも十分に検討されていない。その理由として、論者は、主として受け手の認知を問題とする従来の多くの研究にはリスク・コミュニケーション研究に必要な社会的背景の視点が欠けていたことと、問題が学際的であるだけに「信頼」の概念が曖昧になっていることを挙げて、リスク・コミュニケーションにおいて信頼が注目される理由を社会的な変化との関連で論じ、信頼の概念について概念的定義と操作的定義を整理して、従来の社会心理学の説得研究における「信憑性」概念との相違を指摘している。その上で、最近増加しつつある実証的研究の成果を概観し、それに基づいて、信頼獲得の方法を考える上で「問題のレベル」概念と「手続き公正」概念が重要であると論じている。

第4章は、個人的選択事態に関する理論的研究を検討している。個人の選択に関わるリスク・コミュニケーションでは、一般的には、リスクを回避したり低減したりする方向で行動しようとする個人に対して、どうすれば適切にリスクを伝える

ことができるかが問題となり、このような伝達過程については、従来からの態度変容理論で相当程度説明されるところもあるとして、基本的に態度変容理論に依拠して、どのようなリスク・コミュニケーションが効果的な個人的選択をもたらすかを論じている。他方、人は場合によってはリスクを受け入れたり増大させたりする方向で行動することもあり得ることに着目して、その要因を主として社会心理学的な視点から考察している。さらに、個人的選択も社会の枠組みの中での関心のありようであり、社会的論争と明瞭に区分することができない面のあることを指摘して、社会的論争との関連にもふれながら、一連の研究成果を、消費生活製品、災害、医療場面に分けて概観している。

第5章では、論者が行ったリスク・コミュニケーションに関する実証的研究が報告される。第1節では、人々がきわめて低確率のリスクをどのように認知するかを実験的に検討し、科学技術に関するリスク・コミュニケーションによく見られるきわめて低い生起確率の情報を人々は十分に理解しているとはいえないという結果を示した。確率の値のみでなく、図による説明や文章による説明を加えても理解度が上がるという結果は得られなかった。

第2節では、2つの調査を通して、言語表現をさまざまに変化させることにより、人々がどのようにリスクを理解するかを検討し、人々のリスク認知（確率の推定）は「ときに」「まれに」などの程度の副詞のみでなく、文末の表現との関係で複雑に変化することを明らかにした。

第3節では、放射線技術に関する話題を用いて、その技術の効用のみを伝える一面的コミュニケーションと、よい面も悪い面も伝える両面的コミュニケーションとでは、人々の態度にどのような違いが現れるかを検討した実験が報告される。科学技術についてよい面ばかりではなくそのネガティブな面をも伝えるリスク・コミュニケーションは、メッセージの内容や送り手に対する信頼を高めるといった結果が得られた。また、リスク認知、効用性の評価、社会的受容の3つの指標が、人々の既知の知識量に対してU字型の関係を示すことが見出された。

第6章では、リスク・コミュニケーションとその研究の発展にとって有用と考えられるいくつかの論点について論じている。

## 論文審査の結果の要旨

近年の科学技術の発展は、新たにさまざまなリスクを生み出しており、論者は、以前から知られているリスクを含め、ある程度のリスクを受け入れることは、もはや避けることのできない状況だということ。危険は太古から人間や動物につきまってきたもので、受け入れるかどうかを選択できる、あるいは選択しなければならない危険がふえたというべきではないかとも考えられるが、いずれにしても、論者も指摘する通り、知る権利の社会的合意の形成ともあいまって、リスクをどのように伝えるかというリスク・コミュニケーションの技術的問題の研究に対する社会的要請が大きくなってきていることは、PL法の施行や医療場面でのインフォームド・コンセントに対する社会的関心の高まりなどの例を持ち出すまでもなく認められるであろう。

コミュニケーションの技術的問題については社会心理学を中心とする心理学のさまざまな分野で知見が蓄積されているが、リスク・コミュニケーションに関する心理学的研究は世界的にみても数が少なく、ことに日本での研究はまだ萌芽期というべき段階にある。本論文の最大の意義は、このような状況のもとで、リスク・コミュニケーションに関わる多様な問題を包括的に展望し、関連する実証資料を社会心理学はもとより認知心理学、組織心理学など幅広い分野から収集して、現在求めうる最も広範な体系を構築したことに認められる。米国のNational Research Councilの定義に従って、リスク・コミュニケーションをリスクに関する相互作用的过程と捉え、真の相互作用の実現を阻む要因を検討して、実証的に明らかにすべき課題を明快に整理した意義は大きく、この分野の今後の研究者に指針を提供するものと評価できる。ことに、伝達意志の有無の区別の無視による議論の混乱を指摘して鮮やかに分離した点は、「コロンブスの卵」的な創見として寄与するところが大きい。また、組織心理学的な観点の導入も論者独自の卓見として特記すべきであろう。

論者の実証的研究（第5章）には次のような意義が認められる。

(1) リスク・コミュニケーションにおいて、確率の値によるリスク情報の提示がしばしば行われているが、第1節の実験の結果は、確率でリスク情報を提示されても一般の人々はその内容を理解したと感じていないことを示しており、確率による情報提供の有効性に疑問を提起するものといえる。図による説明や言語的説明を加えても大きい改善は得られていないが、

なお試みるべき改善法は無数に考えられ、確率表現一般を否定するものではないことはいうまでもない。なお、社会心理学者に責めを負わせるべき課題ではないが、確率の理解をどう測定するかという点でも、さらに検討が必要だと思われる。

(2) 副詞等で頻度や確率あるいは被害の強度を言語的に表現する方法もよく用いられているが、どのような表現がどの程度の頻度や確率を示すものと受け取られるかを実証的に示した研究は少なく、第2節の調査は実用的な意義のある資料を提供したものだといえる。

(3) 第3節では、効用もリスクも伝えるリスク・コミュニケーションの方が、効用のみを伝える旧来の説得的コミュニケーションよりも、伝文自体および発信者に対する信頼を高めることが示された。この結果は、リスク・コミュニケーションの基本的理念が倫理的な立場からのみ重要なだけでなく、心理学的な面からみても、リスク・コミュニケーションの送り手と受け手の信頼関係の樹立という点で重要であることを、実験的に明らかにしたという意義をもつ。

全体的にみて、リスク・コミュニケーション研究の枠組みの構築という大きい功績に対してみれば、実証研究の面では、それぞれ詳細に詰めるべき問題を残して断片的な知見という印象を与えるのが惜しまれるが、社会的要請の大きい問題に果敢に挑戦し、基本的な枠組みの構築にまで漕ぎつけた開拓的業績は高く評価できる。

以上審査したところにより博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお1998年12月8日調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。